

書道研究会 西華会 伊澤西嶽の書 リスト・釈文

部	題名	制作年	サイズ	釈文
一部	杜稿鐘隸漆書壁經 (千字文より)	平成 6年	238× 39	
	文選「劇秦美新論」揚雄より	平成 5年	230× 45	
	孫シン老求墨妙亭詩 蘇東坡	平成 4年	163× 45	
	勸酒 于武陵	平成 2年	135× 26	
	妙法蓮華經如来壽量品偈	昭和 61年	70× 35	
	濤聲春雷墨海和響	平成 2年	135× 70	
	歸去來辭 陶淵明	平成 6年	48× 168	
	子夜歌 李煜	平成 8年	20× 35	
	紅樓院応制 沈ゼン期	平成 7年	70× 132	
二部	爨宝子碑臨	昭和 41年	135× 34× 4	
	藍田山石門精舎 王維	昭和 63年	176× 47× 3	
	温恭	平成 14年	28× 40	
	飛觴	平成 9年	34× 31	
	花香百代	平成 2年	33× 44	
	望嶽 杜甫	平成元年	120× 27	
	朝陽飛翔図	平成 5年	135× 34	
	蘭亭 王徽之	平成 11年	135× 34	
	北夕 王維	平成 9年	135× 34	
三部	菜根譚 洪自誠	平成 9年	156× 52	
	菜根譚 洪自誠	平成 8年	140× 52	
	望廬山瀑布 李白	平成 7年	242× 91	
	惜花歎 高啓	平成 6年	210× 69× 2	
	梁園吟 李白	昭和 63年	230× 66	
	五言絶句「李漣に答う」 韋応物	平成 12年	135× 34	
	尋雍尊師隱居 李白	平成 6年	135× 34	
	獨樂園記 宋司馬温公	平成 3年	135× 34	
	觀世音淨聖菩薩普門品偈節文	平成 15年	135× 34	

をクリックすると釈文のページにジャンプします。活字の無い漢字はカナまたは?で表示されます。

千字文より

杜稿鐘隸、漆書壁經あり

草書の名手の杜の書

隸書の名手の鍾の書

漆で書かれた古代の書物

旧家の壁中から発見された古い経典

貴重な書跡や書物が、すべて宮中に収められている

文選「劇秦美新論」揚雄より

振鷺の声庭に充ち

鴻鸞の党漸階す

漸階・「ゆるやかに進む」こと

孫シン老求墨妙亭詩

蘇東坡

蘭亭の繭糸 昭陵に入り

世間の遺迹 猶龍の騰るがごとし

顔公 法を変じて新意を出し

細筋 骨に入つて秋鷹の如し

徐家の父子 亦秀絶なり

字の外に力を出し 中に稜を蔵せり

?山の伝刻 典刑在りて

千載 筆法 陽氷に留まる

杜陵は書を評して瘦硬を貴べども

此の論 未だ公ならず 吾は憑らず

短長 肥瘠 各の態あり

玉環・飛燕 誰か敢て憎まんや

呉興の太守 真に古を好み

断欠を購売して?繒を揮う

龜趺は坐に入り ?は壁に隠る

空齋 昼静かにして登登たるを聞く

奇蹤 散出して 呉・越に走り

勝事 伝説して 友朋に誇る

書 来たつて 詩を乞い 自ら写さんとことを要め

為に 栗尾を把つて谿藤に書せんとす

後來の今を視ること 猶昔を視るがごとし

眼を過ぐれば 百世も風灯の如し

他年 劉郎 賀監を憶わば

還道わん 時を同じゆうせば須らず伏膺せしにと

勸酒 于武陵

君に勸む 金屈卮 きんくつし

満酌、辞するを須 もち はず

花発 ひら いて風雨多し

人生、別離 た 足る

コノサカツキヲ受ケテクレ

ドウゾナミナミツガシテオクレ

ハナニアラシノタトヘモアルゾ

「サヨナラ」ダケガ人生ダ

井伏鱒一訳

歸去來辭

陶淵明

歸去來兮 田園將に蕪れなんとす、胡ぞ歸らざる。

既に自ら心を以て形の役と爲す。奚ぞ惆悵して獨り悲しまん。
已往の諫めざるを悟り、來者の追ふ可きを知る。

實に塗に迷ふこと其れ未だ遠からず。今は是にして昨は非なりしを覺る。
舟は搖搖として以て軽く？がり、風は飄飄として衣を吹く。

征夫に問ふに前路を以てし、晨光の熹微なるを恨む。
乃ち衡宇を瞻て、載ち欣び載ち奔る。

僮僕歡び迎へ、稚子門に候つ。
三逕は荒に就くも、松菊は猶ほも存す。

幼を攜へ室に入れば、酒有りて樽に盈てり。
壺觴を引きて以て自ら酌み、庭柯を眇て以て顔を怡ばしむ。

南窗に倚りて以て傲を寄せ、膝を容るるの安んじ易きを審らかにす。
園は日に涉りて以て趣を成し、門は設くと雖も而も常に關せり。

扶老を策き以て流憩し、時に首を矯げて游觀す。
雲無心にして以て岫を出で、鳥飛ぶに倦みて還るを知る。

景は翳翳として以て將に入らんとし、孤松を撫でて盤桓とす。
歸去來兮、請ふ交りを息め以て遊びを絶たんことを。

世と我と相遺る。復た駕して言に焉にをか求めん。
親戚の情話を悦び、琴書を樂しみ以て憂ひを消す。

農人余に告ぐるに春の及べるを以てし、將に西疇に事有らんとす。
或は巾車に命じ、或は孤舟に棹さす。

既に窈窕として以て壑を尋ね、亦た崎嶇として丘を經。
木は欣欣として以て榮に向かひ、泉は涓涓として始めて流る。

萬物の時を得たるを善み、吾が生の行くゆく休するを感ず。
已矣乎、形を宇内に寓すること復た幾時ぞ。

曷ぞ心を委ねて去留を任せざる、胡爲れぞや、遑遑として何にか之かんと欲す。
富貴は吾が願ひに非ず、帝郷は期す可からず。

良辰を懷ひて以て孤り行き、或は杖を植てて耘耕す。
東皋に登り以て舒に嘯き、清流に臨みて詩を賦す。

聊はくは化に乗じて以て盡くるに歸し、夫の天命を樂しめば復た奚をか疑はん。

子夜歌

李煜

人生愁恨何ぞ能く免れん
銷魂獨り我情何ぞ限りあらん
故國夢に重ねて歸れど
覺め來りて 雙淚垂る
高樓 誰と與にか上らん
長へに記す 秋晴の望め
往事 已に空と成り
還ほ一夢の中の如し

紅樓院応制

沈ゼン期

紅樓こうろう 白毫びやくこうの光ひかりを見るかと疑うたがう

寺しとんは宸居しんきょに逼せまりて盛唐せいとうに福さいわいす

支遁しとんは山さんを愛あいするも情じょうまん漫まんに切きなり

曇摩どんまは海うに泛みちむなぶも路空なしく長ながし

経声けいせい夜よに息およんで天語てんごを聞きき

炉気ろき晨あしたに飄ひるがって御香ぎょこうに接せつす

誰たれか謂おもわん 此この中うち到いたる可べきこと難かたしと

自みずから憐あわれむ 深院しんいん 徊翔かいしょうするを得えしを

藍田山石門精舍

王維

落日 山水好し

舟を漾ただよわせて歸風きふうに信まかす

奇きを玩もてあそんで遠とおきを覺おぼえず

因よりて以もつて源みなもとを？たずねて窮きわむ

遙はるかに雲木うんぼくの秀ひいたるを愛あいし

初はじめは路みちの同おなじからざるを疑うたがう

安たまたまくんど知らん清流つうに轉まじて

偶ふね與す前山ぜんざんと通けいさくずるを

舟かげんを捨すてて輕策けいさくを理おさむ

果ろ然ろとして適てきする所ところにかのう

老僧らうそう 四五人

道遙じょうようして松しょう柏はくに蔭いう

朝ちやう梵ぼん林はやし 未いまだだ曙あけず

夜や禪ぜん山やま 更せきに寂せきたり

道心だうしん 牧童ぼくだうに及および

世せ事じ 樵しょう客きやくに問とう

暝くれに宿やどる 長林ちやうりんの下もと

香こうを焚たきて瑤席ようせきに臥ふす

潤芳かんぼう 人衣じんいを襲おそい

山月さんげつ 石壁せきえいに映えいず

再ふたたび び尋たずぬるとき迷誤めいごを畏おそる

明發めいはつ 更さらに登歷とうれきせん

笑わらつて謝しゃす桃源とうげんの人ひと

花はなの紅くれないなるとき複また來きたり覲みん

望嶽

杜甫

たいそつそ いかん

岱宗 夫れ如何

せいろせい おわ

齊魯青は未だ了らず

ぞうかしんしゅう あつ

造化神 秀を鐘め

いんようこんぎょう わか

陰陽 昏 暁を割つ

うごか そおうん

胸を 盪して 曾雲 生じ

まなじり

皆を 決すれば 帰鳥 入る

かならずままた

会 当に 絶頂を 凌ぎて

しゆんてん

一覽すべき 衆山 の 小なるを

蘭亭 王徽之

山水の景を見て心をなぐさめ、蕭然しょうぜんとして旅路の人となるを忘る
秀色人にせまる美しき松は岩を籠こめて居る

鳥は空にかけりて遊び、魚は水清き池にはねている
之を見などしてよろこび心中に二寄が冥なり

先師はすでに奥深くかくれたるあり
何として世に羈はられる網を用いよう

冲真の徳を保つに如かぬが

同じく箕山の中に隠れて許由や巢父の跡を学ぼう

北ダ

王維

南山北？の下ほくだ もと

宇を結びて敬湖に臨むいえ いこ

樵を採りに去かんと欲する毎にたきぎ へんしゅうこ ほ

扁舟菰蒲より出づ

菜根譚

洪自誠

ねたるついでにやう せいざんりやくすい づんえん どくと

簾？ 高敞、青山緑 水の雲 煙を吞吐するを看ては

けんこん

「乾坤の自在なるを識る

ちくじゆふそ

にゆうえんめいきゅう じじよ そうげい

竹樹扶疎、

乳

燕

鳴

鳩の时序を送

迎するに任せ

まか

ぶつが ふた

物我の両つながら忘るるを知る。

菜根譚

洪自誠

りんかん しょういん せきじょう せいせい せいり きき
林間の松韻、石上の泉声、静裡に聴き来たつて
てんちぜん めいはい
天地自然の鳴佩を識る。

そつさい えんこう すいしん うんえい かんちゅう みさ
草際の煙光、水心の雲影、閑中に觀去つて
けんこんさいじょう ぶんしょう
乾坤最上の文章なるを見る。

望廬山瀑布

李白

西のかた香炉峰に登り

南のかた瀑布の水を見る

流れを挂くか 三百丈

壑たにを噴く 数十里

?として飛電この来るが如く

隠として白はつこう 虹の起つが若し

初めは驚く 河漢落ちて

半ば雲天の裏にそそく 灑ぐかと

仰ぎ観れば 勢い転うたた雄なり

壮さかんなる哉 造化の功

海風 吹いて断えず

江月 照らして空を還めぐる

空中 乱れて? 射そうしやし

左右 青壁を洗う

飛珠 輕霞を散じ

流沫 穹きゆうせき 石に沸く

而して我 名山を樂しみ

之に対して 心 益ますます 閑かなり

論ずる無かれ 瓊液を漱ぐを

還また得たり 塵顔もとよを洗うことを

且つ諧かのう 宿もとより好む所

永く願う 人じんかん 間を辞するを

惜花歎

高啓

花を惜しむは 是れ 花の嬌なまめかしきを愛するならず

頼さいわいに花の開くを得て寂寥せきりょうに伴うとも

樹じゅじゅ樹 長く鈴索れいさくを懸けて護まもり

叢そうそう叢 頻しきりにりに鹿廬ろくろを引いて澆そそぐ

幾回いくたひか花枝かしを折りて？かがんと欲すれど

心こころに花の傷きずつかんことを恐れ 復た手を停む

毎つねに花下かかに来たりて毎つねに詩を題し

花前かぜんに到らずんば酒を持せず

花を看て 直ちに春を盡つさんと準擬じゅんぎせしに

春はるの今未いまだに尽つきざるに 己すに人を愁うれえしむ

纔わずかに片萼へんがくを留めて前砌ぜんせに依り

全すべて千英せんえいの落ちて別隣べつりんを過ぎる

懊惱おののす 園中えんちゆう 花を妬ねたむの女

畫旛がばんは禁とどめず 風雨の狂むえるを

流水、残香 一夜空むなしく

黄こおり？ 魂断こんたへ渾すへて語無ことばし

縦よし 星星せいせいの薜衣せんにに在ある有ありも

拾ひろい来たれば己すで光輝こうきを損そんずるを覚おぼゆ

只ただだ應まさに獨ひとり東窗とうそうに背そきて臥ふし

夢裏むりに相あい随つれて高たかく下ひくく飛とぶべし

梁園吟 李白

我黄河に浮かんで京闕を去り
席むしろを掛けて進まんと欲すれば波山を連ぬ
天は長く水は闊くして遠涉に厭き
古を訪うて始めて及ぶ平臺の間
平臺に客と爲りて憂思多く
酒に對して遂に作る梁園の歌
却つて憶ふ蓬池の阮公の詠
因つて吟ず緑水洪波を揚ぐるを
洪波 浩蕩 舊國に迷ひ
路遠くして西歸安んぞ得る可けんや
人生命に達すれば豈に愁ふるに暇あらん
且らく美酒を飲まん高樓に登りて
平頭の奴子大扇を搖るがし
五月も熱からず清秋かと疑ふ
玉盤の楊梅 君が爲に設け
呉鹽は花の如く白雪よりも皎し
鹽を持ち酒を把つて但だ之を飲まん
學ぶ莫かれ夷齊の高潔を事とするを
昔人豪貴とす信陵君
今人耕種す信陵の墳
荒城虚しく照らす碧山の月
古木 盡ことごとく くる蒼梧の雲
梁王の宮闕今安くにか在る
枚馬先づ歸つて相ひ待たず
舞影 歌聲 綠池に散じ
空しく餘す弁水の東にかた海に流るるを
此の事を沈吟して淚衣に滿つ
黄金もて酔を買ひ未だ歸る能はず
五白を連呼し六博を行ひ
曹を分かち酒を賭して馳輝系に酣ふ
馳輝に酣ひて
歌ひ且つ謠へば
意 方に遠し
東山に高臥して時に起ち來る
蒼生を濟はんと欲すること未だ應に晩からざるべし

五言絶句「李澣に答う」

韋応物

林中 易を觀ること罷み

溪上 鷗に對して閑なり

楚俗 詞客饒し

何人とか最も往還する

尋雍尊師隱居

李白

ぐんしょうみどり

群峭 碧 天を摩し

しょうやう

しる

逍遙 して年を記さず

ひら

雲を撥いて古道を尋ね

りゅうせん

樹に倚つて 流泉 を聴く

せいぎゅう

花は暖かにして 青牛 臥し

はつかく

松高うして 白鶴 眠る

かた

語り来れば 紅色 暮れ

かんえん

独り自ら 寒煙 を下る

獨樂園記

宋司馬温公

われ
吾は愛す杜牧子

きちよう
気調 本より高逸

てい
亭を結び水際に傍い

きろつ えいじつ
揮弄永日を消す。

すすり
硯を洗い詩を抄すべく

さかずき
觴を泛べ宜して膝を促むべし

かんえい
冠纓を濯ふを取ること莫かれ

こうじん
紅塵 清質を？さん